



中高生とともに差別と闘う

『弟は天使!』

吉成タダシ (うずしおランチ代表)



「共に生きる」社会とは

障がいのある子どもをもつ親の思いとは――。

子どもに障がいがあることを卑下することなく、他の子に接するのと同じように誇りを持ち、まなざしを送り、慈しみ、立派に育てあげているケースもあります。それが当たり前の姿だとも思います。けど、そういう家族ばかりかというと、そうではないように思います。

私が出会ってきた家族のなかには、障がいを卑下し、我が子を卑下し、自分自身を卑下しているように思えるケースも少なくありませんでした。けどそれは、その家族だけの問題ではなく、この社会全体に薄く広がっている。「障がい」に対する差別意識の結果のように思えます。

もし、日常的に様々な障がいのある人が身の周りにいて共に生きていければ、それが当たり前になります。けど、実際はどうでしょう。

以前に比べるとノーマライゼーションの意識は向上し、いろんな面でバリアフリー化されてきているとはいえ、ハード面はまだまだのようになっています。ソフト面はなおさらです。「共に生きる」社会が当たり前になれば、実際にどんな障がいのある人がいて、どんなことができなくて、どんなことが必要で、どう接していけばいいのか、自然とわかっていくのだと思います。もし仮にわからなくても、どう対応すればいいのかはわかっていくのではないのでしょうか。

弟は天使!

中学生の語り合いに、別の大学生OGが笑顔で参加してきました。

「今、障がいのある子の話題が出てくるから、どうしても黙っていられないから。」(笑)

自分も一番下の弟がダウン症で、めっちゃ大好きで、よく聞くフレーズで言えば、弟は『天使』ですよ!と、彼女は元気がいっぱい笑っているから、弟への思いを紹介しつつ、近況を語り始めました。

「最近すごいシヨッキングな出来事があった。五月に帰省している時に、中学の時の同級生で障がいのある女の子とたまたま再会したんです。高校は別だったから久しぶりに会って、「おおっ!」みたいな感じで。

自分は一人だったけど、その子は家族と一緒にいて、「一緒にご飯を食べようよ」と言ってくださって、ご飯を食べてたんです。

そこで話している中で「そうそう成人式どこでやるの? こっちでやるの?」って聞かれたんです。自分は十九歳だから来年成人式なんです。それで、「まだ決めてません。どこにいるかわからないから」って言ったんです。そしたら家族の方がその子に、「もしこっちでするなら、あなたも一緒に行く?」みたいなことを言い出したんです。よく意味がわからなくて話を聞いてると、この子には友達がいらないから、成人式に行っても一人になっちゃうから行かせられないと親御さんが考えてて。

成人式って一生に一回しかないのに、

そういうふうな決めちゃってみたいなんです。自分はその子と仲良くしてたから、私が行くのだったら、一緒に行かせようかなみたいなこと言ってます。

それを聞いて、そういうふうな思わざるを得ない状況があるってことじゃないですか。受け入れてくれる場がないっていう状況というかな。

で、自分もその時困っちゃって。その子のことはすごく好きだし、一緒に行くのは全然いいんだけど、自分も成人式に行ったら友達に会うし、その子とずっといられる訳じゃないし、どうしたらいいんだろうって、すごく困っちゃって。ほんと、どうしたらいいのかわからなかったんです。でも、そういうふうな家族の人が思わざるを得ない状況、社会になっちゃってるといっていいじゃないですか。

障がいのある子のことを100%理解するのは難しいかもしれないんですけど、でも、その子のする行動がわからないからといって、シャットアウトして、よそ者のように扱ってしまうというかな。だから、さっき言った子(障がい者に足を踏まれた子)のようにな出来事があったも、それがすべてだとは思わないでほしい。その人のいろんな部分を見てほしい。そうしたら、何かちよつとつ心が開けていって、わかっていくことがあるかもしれないな!と、思いました。すみません!

未熟さも葛藤も醜さも

私が人権学習でいつも子どもたち

に願うこと。それは、障がいのある同級生が自然に、当たり前のように、成人式や同窓会に来られるような関係であり、町になっていってほしいということ。

彼女は決して声高に述べたわけではなく、こうあらねばと押しつけたわけでもなく、ただただ笑顔で、淡々と自らの思いを語っていました。

「〜してはいけません」
「〜しましょう」

人権学習をしていると、よく聞かれるフレーズ。それはそうなのでしょうが、どこか自分のことは置いといて、お説教でも聞いているかのような感覚になります。果たしてそれで本当にわかっていくのでしょうか。

「本当にわかる」とは、どこから押しつけられてわかったようなつもりになるのではなく、自分の中でちゃんと飲み込めないと、そうはなりません。お説教が必ずしも悪いとは言いませんが、自分の中にある未熟さや葛藤、醜さをも認めたいと、自分がどうありたいのかをただ語る。語り合う。それだけで十分だと思うのです。

障がい者の思い。障がいのある子どもを持つ親の思い。そんなの、遠いところで生きている人間にわかるはずがありません。だからこそ決めてつけてシャットアウトしないこと、排除しないこと、関わり続けること、つながり続けることだと思っております。きつと「本当にわかる」とは、その延長線上にあるのです。